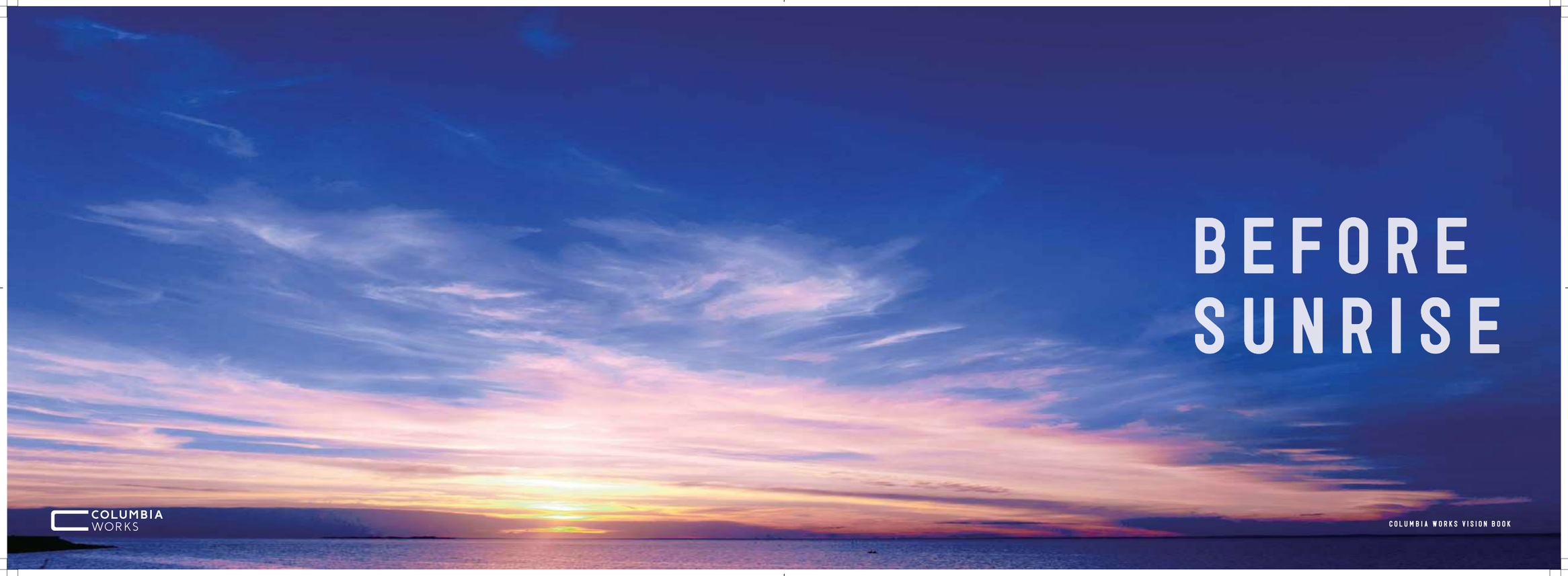
H4

H1

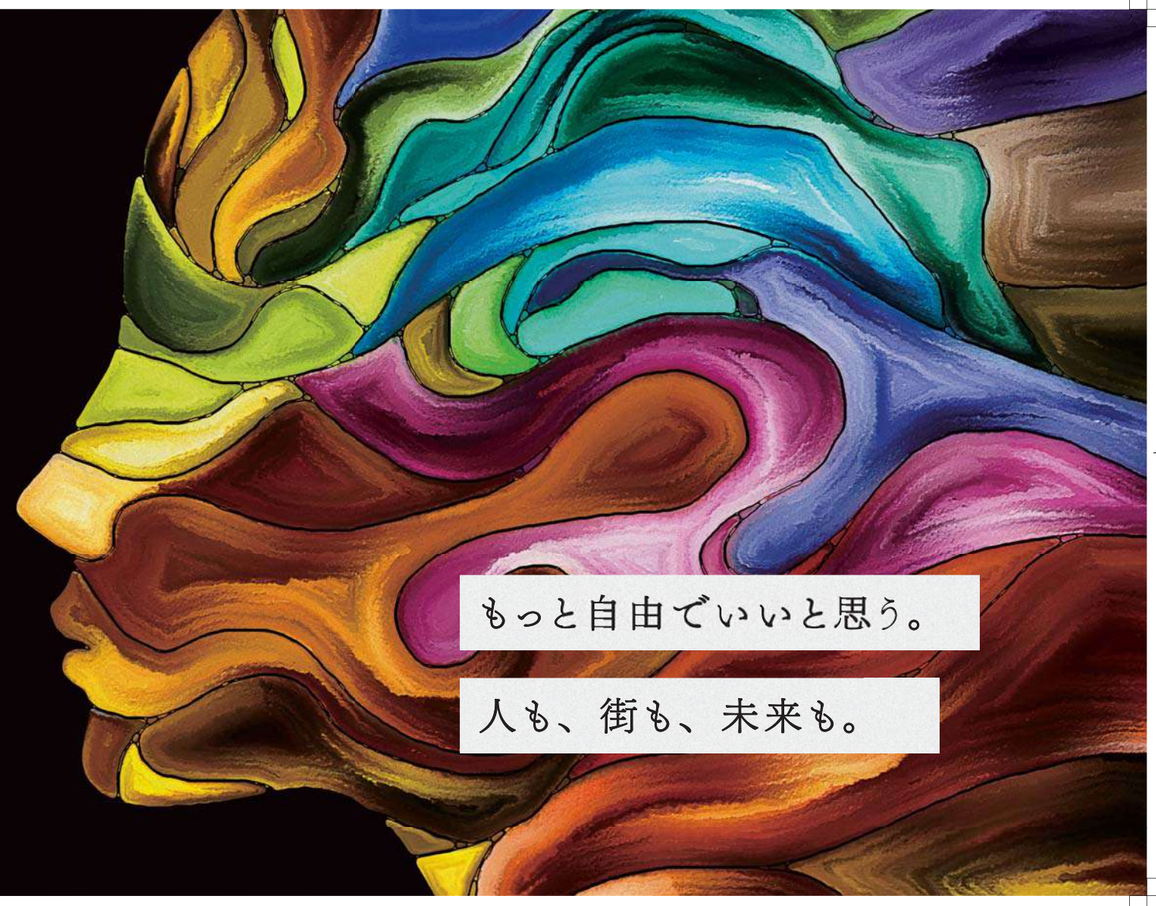


夜明け前、薄暗い道の途中。

この街が

つまらないのは、

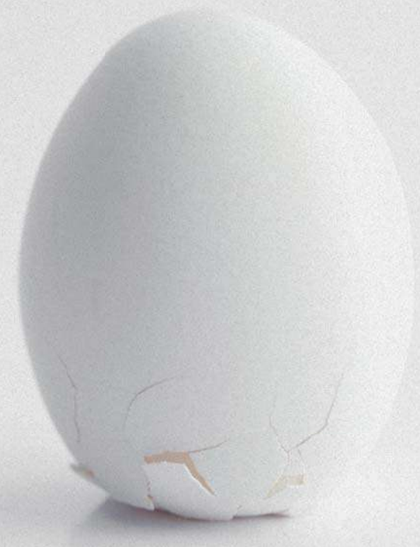
なぜだ？



もっと自由でいいと思う。

人も、街も、未来も。

「こうでなければならない」という固定概念が嫌いだ。もっと正確に言うと、そういう押し付けが嫌いだ。世界をよりよくするための法律やルールは当然守るべきものである。しかしながら、世の中には無駄なルールや慣習も多い。それらは正義の仮面をかぶって鎮座していることも多い。それに気づかないと、知らず知らずのうちに、自分の思考と行動が無駄なもので縛られることになる。「本当に必要なものはなにか?」「本質はなにか?」という問いを心の中に置いておくこと。考えることをやめないこと。私たちはベルトコンベアーの上に乗せられた工業製品ではない。人間なのだから。



マンション事業部の人が

土地を仕入れるとマンションが建つ。

ホテル事業部の人が仕入れるとホテルが建つ。

その場所に本当に必要なものは、

マンションでも、ホテルでもなかったとしても。

建物をつくる。
人が輝く舞台をつくる。

建築物は、

長い時をかけて、土地に息づく。

その土地の日常になり、風景になり、歴史になる。

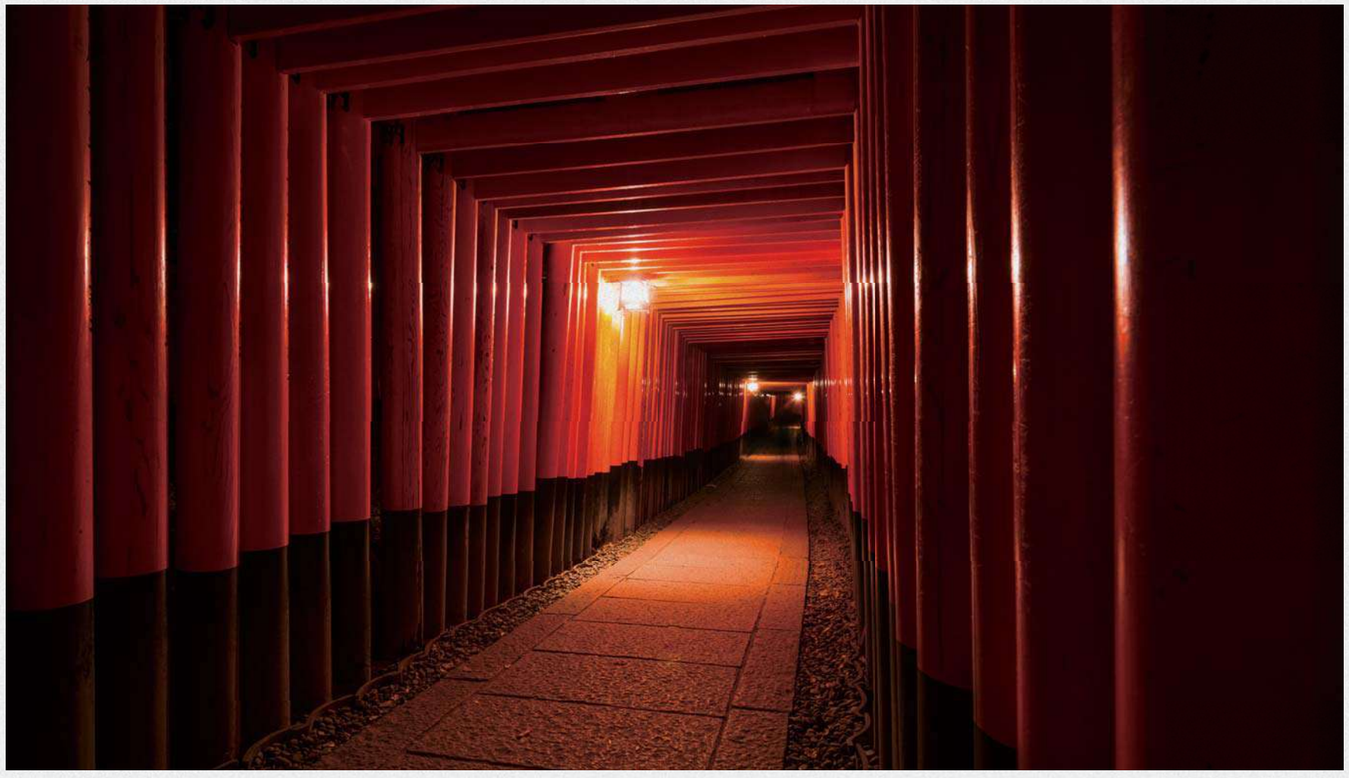
建築物をつくるということは、

その土地の空間をつくることであり、

その空間に生きる人々の人生の舞台をつくることだ。

さて、

どんな舞台をつくろうか。



泊まれる美術館、誕生。

2020年、日本は4,000万人の観光客を受け入れる国になると言われている。

2040年には6,000万人にまでふくらむと言う。空前のホテル建設ラッシュである。

しかしながら、無機質な顔をした、灰色の箱が増えていくばかりでいいのだろうか。

ただ泊まるだけのホテルは誰かがつくる。私たちは、私たちにしかできないことを。

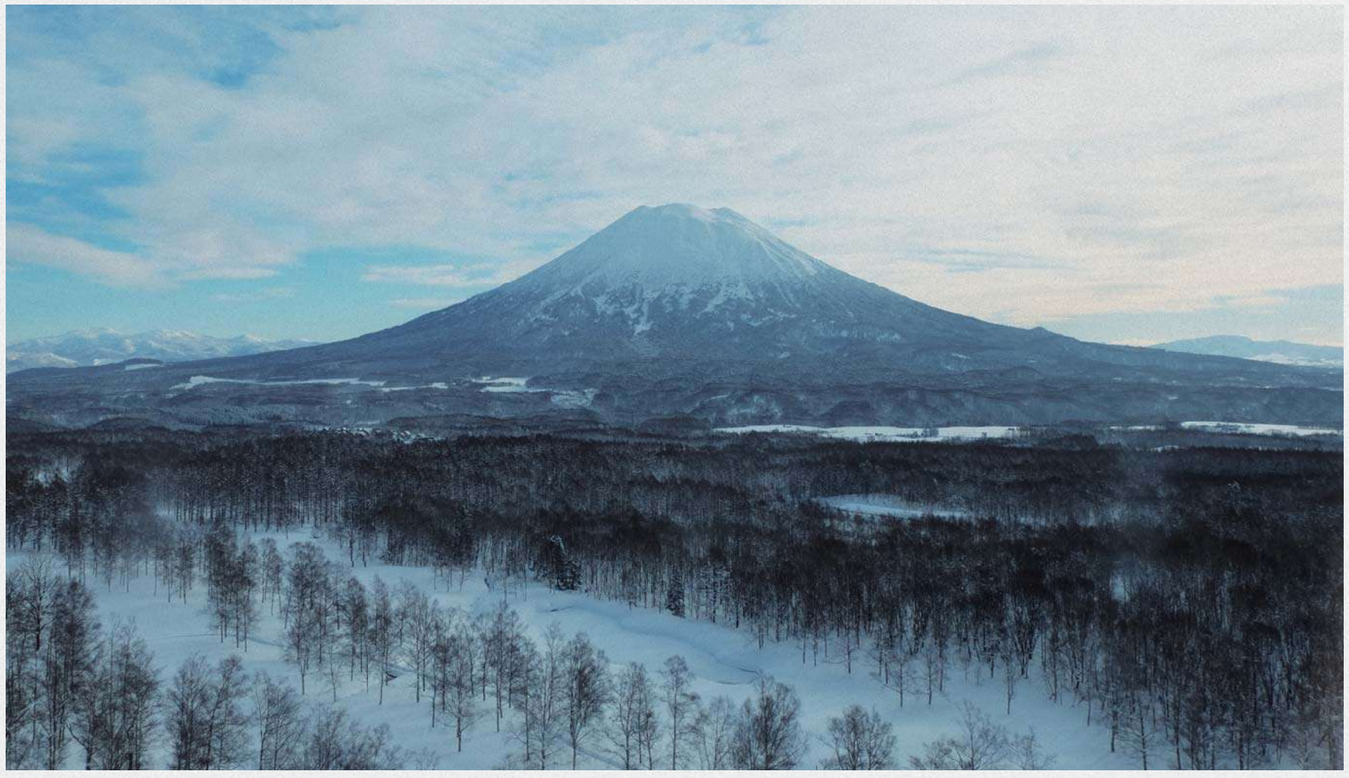
「泊まれる美術館」というコンセプトを冠した京都のアートホテルは、

アーティストが考えるアートとの暮らしを提案する場所だ。

アートを通して人の感性をゆさぶる。アーティストの活躍のステージを広げる。

私たちが大事にしている「ユニキュベーション」を体現した一つの例である。

まじめに妄想する。　本気で遊ぶ。



「ニセコの山を
買ってください。」

冗談で言われたのかもしれない。

いや、大真面目なのかもしれない。

しかし、考える余地はある。おおいにある。

ニセコの山で何をやろうか。どんな面白いことができるだろうか。

現時点での自分の知識は何の役にも立たない。

それくらいの気持ちでいたほうがいいと思う。

これから吸収すべき膨大な学びを遮る可能性がある。

ゼロになれる強さを持て。

知を武器にする。

私たちの事業には巨額の資金が動く。

世界の仕組み、産業の仕組み、金融の仕組み、不動産の仕組み、建築の仕組み。

様々な仕組みを把握しておかなければ、リスクの把握ができない。

リスクのコントロールは事業計画をおこなう上で、もっともおさえておくべき基本事項であり、

コロンビア・ワークスのようなベンチャー企業にとってはもっとも重要なことである。

どこでどんなことが起きると、どんな問題が発生して、私たちの仕事にどのように影響するのか。

お金はどう動くのか、どんな規制やルールがあるのか。

ビジネスを自分で動かすということは、知を操るということと同義語だと思う。

学ぼう。知は私たちの最大の武器になる。

私たちの仕事は、

知識と論理の積み上げだけで完成される仕事ではない。

環境や建築という、

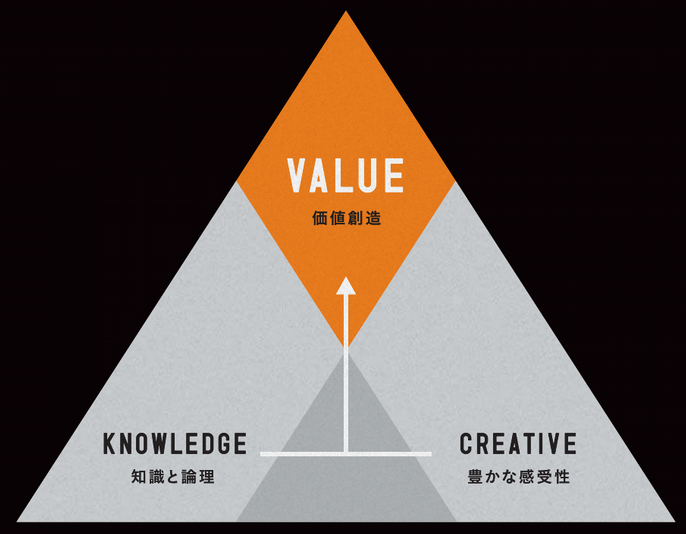
空間をプランニングするというクリエイティブな仕事との融合で

成り立っている仕事だからである。

知を操ることと、豊かな感受性とセンスを持つこと。

両方ができてはじめてプロフェッショナルとしての

スタートラインに立つことができる。



歴史を紐解く。

明日の理想を追いかける。

株式会社コロンビア・ワークス 取締役　水山 直也

京都生まれ、京都育ち。いつまでも色あせない文化が息づく街の風景から、歴史を尊重することの大切さを教えてもらってきたように思う。むやみやたらに新しいものを追い求めるのではなく、歴史を紐解きながら、土地の文化や風景に馴染むような街づくりを目指したい。僕の仕事の根底には、そんな考え方が流れている。注意しなければならないのは、歴史を大切にするということと、古い前例や慣習にとらわれることは違うということだ。巨額が動く仕事だけに、様々な制約や規制に揉まれることも多い。理想を掲げても、現実は絵に描いたように簡単には進まない。画期的なことをやろうと思えばなおさらである。理想をあきらめるのは簡単だ。理想を実現するために、何ができるのか。僕らの日々は、自分の真価が問われるタフな場面の連続である。様々な分野の幅広い知識、多角的に物事を見つめる柔軟な視点、五感をフルに動かす発想など、様々な能力が求められる。正直、涼しい顔をしている暇はない。だが、幸い辛いと思ったことは一度もない。日々、新しい何かに出会えるからだ。立ち止まらない。本質を守りながらも、新しく変化し続けていく。
コロンビア・ワークスの歴史をともにつくっていく頼もしい仲間と出会いたいと思っています。

NAOYA MIZUYAMA

変化の日々を、駆け抜ける。

熱く、高い志を持って。

株式会社コロンビア・ワークス 代表取締役　中内 準

不思議に思うことがたくさんある。たとえば、どうしてマンションの1階と最上階ではこうも景色が違うのか。1階の人にも最上階の人のような景色を見せる方法はないのか。だったら、ルービックキューブのように回転するマンションをつくれないものだろうかとか。バカなんじゃないの？と思われるようなことでも、セロベースで考えたい。もし実現できたら、喜ぶ人がいるから。誰かの幸せにつながるから。それがなければ、1兆円を動かす仕事であってもワクワクしないと思う。ただ、人に驚きや感動を与えられる様な仕事を生業にして生きていきたいが、現実はそう簡単ではない。生きていくためには収益をあげなきゃいけない。優秀な人を採用するための資金も必要だし、教育や研修のための投資も必要だからだ。僕らの今は、そんな理想と現実の間にある。正直、楽じゃない。だが、最高にエキサイティングな日々だと思う。コロンビア・ワークスに入社するということは、完成された会社ではなく、未完成の会社に入社するということ。変化の時代を一緒に生きるということ。コロンビア・ワークスは、10年で大きく変わる。いや、半年で変わる。これから、どんな景色を見たいか。

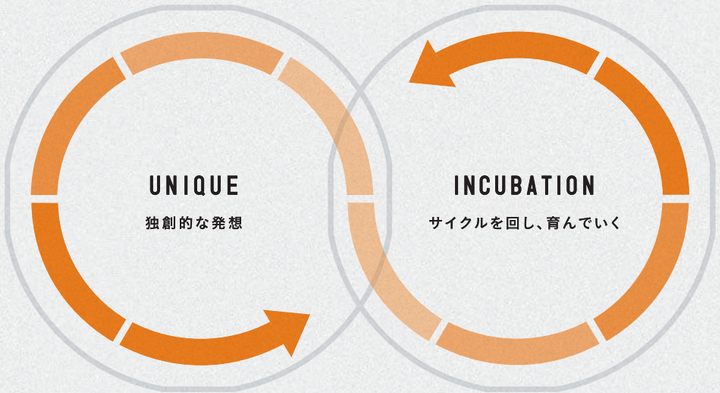
変化する日々を共に走り、志高く未来を熱く語り合える人に出会いたい。

これからの未来を創るのは、他の誰でもない。君たちだからだ。

HITOSHI NAKAUCHI

UNICUVATION

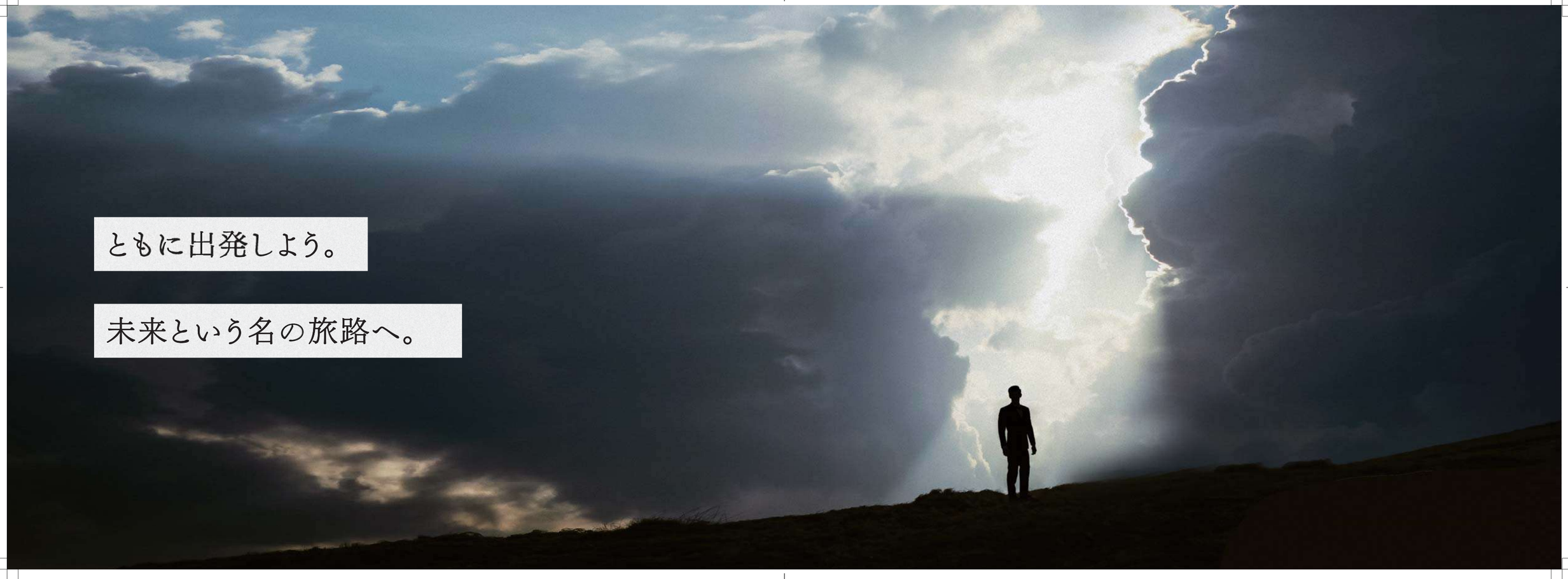
独自の発想を起点に、その発想を膨らませ続ける



ユニキュベーションによって、想像と体験のサイクルを生み出し人が輝く舞台を世界に創る。

街は住む人や訪れる人同士の「つながり」や、文化や流行との「つながり」を人々が想像し、体験できる舞台である。人々の想像する街を具現化し、住む人や訪れる人が多彩な感性で体験することで、そこにまた新しい想像が生まれていく。そんな想像と体験のサイクルが生まれる街づくりの技術を、私たちは「ユニキュベーション」と名付けた。ユニキュベーションによって、何年、何十年先も人々が変化を楽しみ、輝き続ける街づくりを。

やるからには、色褪せない価値を。


ともに出発しよう。
未来という名の旅路へ。